

ベルマーク新聞 10月号

発行 公益財団法人ベルマーク教育助成財団 東京都墨田区両国3-25-5 JEI両国ビル9階 〒130-0026 電話 03-5638-2320(代表)
郵便振替口座 00100-7-56035 ホームページ <https://www.bellmark.or.jp/>

マヨネーズのひみつ、オンラインで

キューピーの施設見学、ベルマークくんが体験取材



①マヨネーズドームの入り口は星型のしぼり口になっている ②マヨテラス案内役の田伏優子さん(左)と伊藤愛さん ③マヨテラス運営チームの鈴木正史さん(左上は、見学に参加したベルマークくん)
④クイズに正解すると野菜をゲットできる。全部集められるかな? ⑤マヨネーズ隊長の坂東香奈さん(左)と塩見彩さん ⑥神戸工場前からキューピー人形が出迎えてくれた

協賛会社のキューピー(ベルマーク番号07)はビデオ会議ツールのZoomを使ったオンライン見学を実施しています。コースは10種類以上、所要時間は各30~45分。今回は小学生向けの二つのコースを選び、財団マスコットのベルマークくんと一緒に参加してみました。

●「マヨネーズのひみつ発見」(見学施設マヨテラス=東京都調布市=から中継)

「こんにちは、ベルマークくん。聞こえますか?」

映像がつながると、案内役の田伏優子さんが早速話しかけてくれました。参加者が揃ったところで、同じく案内役を務める伊藤愛さんも登場です。

田伏さんがまず向かったのは、マヨネーズドームです。ここでは、栄養いっぱいであるマヨネーズを作れる理由や、使っている油の種類、どのような

素材から酢を作っているか、さらに「乳化」についても学びました。

続いて、キューピーギャラリー。1925年に初の国産マヨネーズを作ったキューピーの創始者、中島董一郎さんの肖像画や、初期のマヨネーズ瓶などがわかりやすく展示されていました。

その次は「なるほどマヨネーズ」というマヨネーズに関する情報を紹介するコーナーとマヨクックの時間です。「なるほどマヨネーズ」ではマヨネーズの小ネタをクイズ形式で学ぶことが出来ます。マヨクックでは、事前に各自用意したマヨネーズと、ケチャップやカレー粉などの調味料を混ぜて、実際に野菜を食べます。子どもたちの「おいしい!」という声が聞こえてきました。

マヨテラス運営チームの鈴木正史さんによると、このコースのねらいは「野菜

を食べることにつながる」ということ。「想像力を働かせて新しい味をつくることは、『それに野菜を付けて食べてみたい』というステップにつながる」との考えから、楽しい実体験の提供にこだわっています。

●「マヨネーズ工場探検隊」(神戸工場から中継)

「マヨネーズ隊長の塩見です」「坂東です」元気な挨拶が画面から届きました。見学者は探検隊員で、その任務は工場内を見て回りながらクイズに正解して野菜を集めていくことなのです。隊長は神戸工場広報CSVチームの塩見彩さんと坂東香奈さんです。

最初のクイズは「ハロウィンに飾る野菜は?」というもの。みんな見事に正解し、まずは1個目の野菜、トマトを手に入れました。

次に映し出されたのは工場内で様々なロボットが動いている様子です。どれもリアルタイムでの中継で、参加者は前のめりになって画面をのぞき込みます。

映像の合間にもクイズが出されます。子どもたちは順調に正解し、無事にじゃがいも、パプリカなどの野菜を集めることが出来ました。

その後、合わせマヨづくりや質問コーナーがあり、子どもたちは盛りだくさんのメニューにとっても満足したようです。

◇

個人だけでなく、10人以上の団体や、小学校単位のオンライン社会科見学も受け付けています。個人の予約はインターネットで、団体は電話で申し込んでください。詳細はキューピーの「オンライン見学申し込みサイト」(<https://reservation.kewpie.co.jp/>)をご覧ください。

東日本大震災、10年過ぎても支援継続

今年度は120校に計600万円相当の備品やバス代

東日本大震災から10年が過ぎましたが、未曾有の津波と原発事故に見舞われた東北地域の傷跡は、いまだに十分に癒えていません。ベルマーク財団は2021年度も被災校の支援を継続します。支援総額は600万円相当。支援対象は岩手・宮城・福島各県の小中学校120校です。

ベルマーク財団では2011年の震災発生直後、被災校にノートや鉛筆を送りました。以来、現在までずっと支援を継続してきています。その総額は5億円超、支援した学校はのべ2146校になります。

支援の原資は各方面からの寄付、参加団体が申し出た

友愛援助、全国から送られてきた寄贈マーク、ウェブベルマーク協会からの助成金、そして、ベルマーク参加団体がふだんの活動で生み出している援助資金です。

ベルマーク運動は、お買いものをするすると購入額の1割が自動的に財団に寄付されます。コロナ禍にもかかわらず、子どもたちのためにと、ベルマークを集めて送ってくださるみなさんの活動が、こうした支援を実現する力になっています。「すべての子どもたちに等しく質の高い教育を」という願いを込めて、財団では今後もハンディのある学校を支援し続けていきます。



財団が支援したバス代を活用して現地調査する中学生